⑧「瞑想」と「精神―物質合成エネルギー」

I　さて、これまで最終章である第四章の読解を通して、時々刻々すべての人間に例外なく迫りくる生の諸問題の様々な事象に対して、静かな精神と言葉を糧とする考える精神がどう対応していくのか比較検討しつつ考察を重ねてまいりました。そして言葉を糧とする考える精神の働きを引き継ぎつつ、静かな精神が機能する状態である「ハート」の働きの持つ素晴らしさについて、具体的に可能な限り見てきました。ここからはクリシュナムルティの教えの中核に位置するものである「瞑想 meditation」及び「瞑想」とは密接不離な関係にあるエネルギーを軸に据えて、これまで四回にわたった読解も振り返りつつクリシュナムルティ理解の中心に辿り着くべく更なる考察をしていきたいと思います。

Q　エネルギーについては、すでに幾度か触れてかなり詳しい考察を施していると思うのですが。

I　確かにそうですが、ここは「瞑想」というクリシュナムルティの教えの核心をなす問題を考察していく上で、エネルギーについてどうしても見ておかなければならないところがあるので、これまで見てきたところとは視点を変えて考察していきたいと考えています。

Q　私は『クリシュナムルティの瞑想録』を読みましたが、この本は、「瞑想」の多種多様な側面がクリシュナムルティによって次々と描き出される様を読者は目撃する、そんな内容の本となっていますね。

I　ええ。この本では確かに各ページ毎に「瞑想」について語られており、それと共に次々と真実をおおっているベールが剥がされていき、その本当の姿が見えてくる、そんな不思議な言語空間が充満していますね。

Q　私にとっては次の箇所がとりわけ印象深かったですね。

> 瞑想は新たなるものの不断の開示である。新たなるものは反復的な過去を超越したものである。瞑想とはこの反復に終止符を打つことである。瞑想がもたらす死は、新たなるものの永生である。新たなるものは思考の領域にはなく、瞑想とは思考の沈黙である。……それはそもそものはじめから観察者の存在しない沈黙のことである。

I　確かに印象深い一節です。この一節の中にも、瞑想の本質が見事に看破されています。つまり、瞑想は新たな世界、未知の世界を切り拓いていく行為であるが、それは静寂な精神の下、沈黙とともに、観察者なしに知覚・認知できる状態において可能であるということではないかと思います。

Q　そして、これまでの読解の中で特に力を入れて考察してきた「気づき」の働きが瞑想と密接不離な関係にあると言えるわけですね？

I　ええ。D教授は『Kのヨーガ』の「まえがき」で、この本全体にわたってまず第一にもくろんだのは、「気づきを通して〈瞑想〉を行うことの必要性を強調することである」と述べており、事実クリシュナムルティの教えに関する約百近いQ&Aの二割に相当する項目の中に「瞑想」に関係するものが入っています。D教授は、この本の中で明らかにしようとしたクリシュナムルティの教えの中心を次のように要約しています。

> 志向されたことは、推論の過程を通して到達するところのある種の結論ではなく、完全なる〈変容〉である。このことは、〈断片化〉が間違いで、それゆえ〈全体性〉が正しいということを言っているのではなく、〈全体性〉は事実そのものであり、〈断片化〉は事実の曲解を意味しているということである。要するに、全体性は修正された状態とか最終の状態を意味するのではなく、〈生命〉そのものが分離できない特質をもっていることを表していること、この状態をもたらしてくれるのは〈瞑想〉をおいて他にないのである。

Q　「瞑想」こそはまさに教えの中心なのですね。それに関するとりわけ代表的なQ&Aを一つ挙げてもらえませんか？

I　例えば、「統合された瞑想の実相を示してもらえないですか？」という質問に対して、D教授は次のように答えています。

> 瞑想の最も重要な焦点は現在に置かれる。これができれば、われわれは過去の影響の下で諸部分や概念の中に

分け入るようなことをしなくてすむ。それゆえ、われわれは無量なる全体性の中で生きることになる。一時も決して止むことのない現在に生きていくにつれて、諸部分もまた境界線のない全体と同じような無量性をおびていることが感得される。このように、たとえそれが全体のものであろうと部分的なものであろうと、限定された境界線を引くことにわれわれはまったく信を置くことができなくなる。というのも、最終的には、境界線なるものは存在しないからである。

Q　しかし、いかなる時においても過去そして未来の介入を許すことなく、今という現在時にとどまり続けることは、至難の技なのではないでしょうか？

I　そのような特質を見据えて、クリシュナムルティ自身もある本の中で、「瞑想は人生における最も偉大なアートの一つ――というよりまさに最大のアート――です」と言っています。（『既知からの自由』）

Q　「瞑想」はアートと言われると、ではその方法は、手段はとつい尋ねたくなりますね。

I　いや、これはあなた自身でよく考えていただきたい問題です。これまでの「気づき」についての考察をはじめ、静かな精神の活動面である「ハート」の働きをいっしょに見てきたわけですから、その過程をふまえてみてください。「瞑想」はアートと言われるとすぐに方法・手段を求めるということは、自分以外の人間に頼り、自らの身体全体を通して行為しようとはしていないということです。

Q　人は自分以外の誰からもアートを学ぶことはできないということですね。

I　それはどんなテクニックももたず、それゆえ権威は存在しない。あなたが自分自身について学ぶとき、自分自身を見守るとき、自分の歩き方、食べ方、口にする言葉、ゴシップ、憎悪、嫉妬を観察するとき――もしもあなたが自分の中のそうしたすべてに無選択に気づいているなら、それが瞑想の一部なのです、とクリシュナムルティは言います。

Q　「瞑想」はわれわれの日常生活の真只中で現出しうるということですね。

I　そうです。日常すべてが「瞑想」の場なのです。自らの肉体、神経、精神、ハート、目、耳、すべてをもっ

て完全な注意を払っていくときには、そこに存在するのは鋭敏さであり、瞑想者のいない、観察者のいない、瞑想・気づきの状態にあり、そこから自然発露的に現れ出る行為は人間関係の中で決して争い・対立を呼び起こさないものとなると言えるのではないかと思います。

それでは、これからの読解の流れの大筋を述べておきたいと思います。

まず、クリシュナムルティの教えの中での「瞑想」の持つ意義の中核的なところを踏まえた上で、これからは「精神はエネルギーである」とのクリシュナムルティの教えの中でも極めて象徴的なメッセージに込められた意味をつかむこと。加えて、これまでの読解を振り返りつつ、精神と物質に関する歴史的対立の構図の中における、クリシュナムルティの教えの立脚点を見定めること。そしてこれらにより拓かれてくる新たな地平について、D教授の『Kのヨーガ』の中の序論、「精神と物質 Mind and Matter」及び「精神―物質の合成物としてのリアリティ Reality: A Composite Mind-Matter」の内容も織り交ぜながら、考察していくこと。

Q ところで、「精神はエネルギーである」という言葉を聞きますと、私の場合はベルグソンの『精神のエネルギー』（宇波彰訳）を連想してしまいます。

I 小林秀雄氏が徹底的に読み込んだ西洋思想家はベルグソンであったとのことですが、小林氏はベルグソン論である『感想』を中断した形で終えており、稀代の思索者であられた小林氏によるベルグソン論の全貌を見ることができなかったのは実に残念です。しかし「心」という不思議な世界の実在に魅せられ、ベルグソン論を展開する一文字一文字の中に、小林氏のまさしく精神エネルギーが発揮されたわけで、そこに五年間（雑誌連載期間）の重みを読み取ることができるのであり、そこに私は魅力を感じます。

ところで、これからの読解は、精神と物質の関係をめぐる考察になるわけですが、このテーマについては、先に廣松渉氏の『身心問題』を取り上げ、精神（心）と物質（身体）をめぐる関係の見方に関して代表的なものを紹介しました。この他にも私はこれまで精神と物質の関係をめぐる論考について、いろいろ読んできました。最近では、大森荘蔵氏の『流れとよどみ』所収の「心身問題、その一答案」、種村完司氏の『心―身のリアリズム』、尾高朝雄氏の『自由論』所収の「精神と物質」、エルヴィン・シュレーディンガーの『精神と物質』（中村量空訳）

などです。これらの本の中での精神と物質に関する論考は、それぞれの著者の個性に基づいた目を見開かせる論が展開されていてそれぞれ魅力的でありますが、とりわけ、今紹介した小林秀雄氏の『感想』で触れられている内容が私には強烈な印象を与え、記憶に残っています。

この論考は、小林氏の思索する精神の息づかいを感じさせる筆致で展開されており、氏の一言一言が醸し出す世界、ここには真に思索する精神をリアルタイムで追体験できる豊饒な読書の世界が確かにあると言えます。

Q さすが小林秀雄といったところですか。

I ええ。ここに『感想』があるので、精神と物質の関係について述べている箇所を紹介しますね。この箇所はベルグソンの本質を看破していると同時に、小林氏自身の生への姿勢をも表しているところだと思えます。

> 予(あらかじ)め考えられた方法があり、これによって対象が究められるという事は、彼の仕事では決して起らなかった。対象を究める方法は、いつも対象自体が教える。出来る限り物に即して見ようとする態度が、自(おのずか)ら物の見方を決める。そういう対象の直接な経験の徹底的な尊重が、彼の仕事の根柢(こんてい)にあった。根柢にあったというより、それが彼の仕事そのものであったと言ってよい。

小林氏はこの考察に続けて、実在と経験、そして精神と物質の関係について更に次のように考察を深めていきます。

> 実在は、確かに経験に与えられているし、経験にしか与えられてはいない。私達が、内的経験と外的経験と呼んでいいような二つの異なった性質の経験を持っているのなら、それは、精神と物質と呼んでいいような実在の二つの領域に、それぞれ直接に応じつつ、私達は生活していればこそだ。これら二つの領域が、どういう統一に下に、全体を成しているかは、誰も知らないが、両者が互いにぴったりと触れ合っている事は、経験上の事実である。（傍点稲瀬）

このように小林氏は、経験領域を二つの内的・外的領域に分けることを、経験上の事実として認めた上で、それぞれの領域を精神、物質と呼んでよい、と二つに分けて捉えることに基本的に同意していることが分かります。

Q　内的経験としての精神を基本的に取り扱う研究が「哲学」で、反対に外的経験としての物質を取り扱う研究が「科学」と呼ばれるわけですね。

I　ええ。小林氏は経験内容に準じ、哲学、科学という異なる方法を持つのは当然であり、しかも精神は物質に接合しているのだから、互いに接合する筈だし、互いに験証し合える筈である、と。

Q　ここで小林氏は重要な事を指摘していますね。精神と物質が互いにぴったり触れ合っている経験上の事実を基にして、両者は互いに接合し、そして、その接合から互いの内容について験証できる「筈」といっていることです。

I　ええ。「筈」と言っていることからして、小林氏にしては厳密性を欠く、あいまいさを残す、想像の域を出ないという面は残るものの、精神と物質が触れ合っていることは事実であり、それが、ある統一のもとにあるのだが、しかしこの統一は誰も知らないと断言している点が、注目されます。付け加えますと、精神と物質を統一するものがあるという点については、さきほど私があげたシュレーディンガーも同様な認識を持っていたと言えます。

Q　ただ、小林氏が言う「ある統一のもとに」という示唆の内容そのものについては小林氏も言及しておらず、いや統一は確かにあるのだが、その実態については誰も認識できないということを表明しているわけですね。

I　ここは見過ごすことのできないところだと思えます。何をもって小林氏は精神世界と物質世界がある統一体の中にあると言えるのか、そして、その言明に対して、なぜ誰も知ることができないと認識上の限界を画定したのか、この重要な点については小林氏の言葉から、私の知る限りでは残念ながら窺い知れないのです。

そして小林氏が言及しなかったこの点について果敢に探求をすべく挑戦的な対話を行ったのが、他でもないクリシュナムルティとボームであったわけです。両者の精神エネルギーが横溢している対話集である『人類の

未来』（前掲書）などでは、精神と物質の関係、そしてそれら二つのものの共通の源泉にまで探求のメスが入れられており、幸いにもわれわれはそれを辿ることができるのです。

これから先は、できるだけ彼の洞察力が開示する世界を浮かび上がらせてみたいと思います。先ず、『Kのヨーガ』の中で指摘されているように、クリシュナムルティは、世界（実在）の見方を支配してきた物質の世界と精神の世界とを分離した見方そのものに対して根本から異議を唱えているということです。

Q　ということは、世界（実在）そのものの把握において、クリシュナムルティは精神と物質と二つの領域にわけて捉えていくことよりも、両方の接点をできるかぎり正確に捉えていくことに腐心したということですか？

I　両方の世界の接点にある「精神―物質合成エネルギー」に人類の未来を託しているとの強い印象を私は受けました。その意味では、クリシュナムルティのエネルギー観の多角的な検証は、混迷を極める現代に生きるために依拠すべき基盤を見据えていく上で、今後重要な課題となると私は確信しています。

Q　世界の見方を支配してきた物質の世界と精神の世界との分離した見方について、具体的に説明していただけますか？

I　今からの話は、『Kのヨーガ』の序論を話の展開のベースに据えつつ、この本の補足篇に収録されている「精神と物質」及び「精神-物質の合成物としてのリアリティ」の内容も適宜盛り込みながら、進めていきたいと思います。

「精神と物質は常に分離されてきた。科学者たちは概して物質に集中し、他方哲学者たちは精神に集中するというふうにして。そして、理性の時代が到来してくるに及んで、精神と物質のうち、どちらが優越しているかという覇権をめぐる論争が行われた」とD教授は精神と物質の対立を描いていきます。

Q　近代以降、精神と物質を見比べてみるに、物質世界を対象とする諸科学の隆盛は目をみはるものがありましたね。物質は世界において、思いもよらない位置に、いわば祭り上げられたわけですね。では、精神は相対的にその立場が急落したというわけですか？

I　いや。D教授が言うには、そうではなかったのです。つまり、精神に重きを置く傾向にある人々は、依然

として「魂」とか「自我」とか「アートマン」というものに、大いなる信頼を置いていた。ただ、それがいかなる実体を持つものであるかということについての彼らの知識は、物質に関する科学者たちのそれに比べると、はるかにあいまいなものであったというわけです。

Q　あいまいなものであるだけに、かえって漠たる憧れが精神世界に対してはあるとも言えますね。

I　ええ。それからこれとは別の思潮が、精神に対する継続的な尊敬の念をもたらす上で貢献したとD教授は言います。物質諸科学及び技術そのものの成長は、思考というそれ以前に存在する力によっていることは気づかれていたというのです。

Q　デカルトあたりのことを言っているのでしょうか？

I　そうです。もしも精神活動が機能しなかったなら、物質の勝利は白紙の状態に留まっていたとD教授は言います。「我思う、ゆえに我あり」とデカルトは宣言したが、われわれは人間の驚異的な進歩の基礎をなしているのは、原子ではなく知覚であり、知覚により安定した力強い精神のもたらす才気によって支えられた。具体的には、ソクラテスの定義、プラトンの「イデア」、アリストテレスの「三段論法」、ミルの帰納法、類推法、目的論、ヘーゲルの弁証法、これらすべては精神活動によるところのものである、とD教授は言います。

Q　なるほど。精神は物質との対決の中で決して負けることはなく、むしろ名声を保持・高揚させることができていたというわけですね。

I　ええ。物質と精神が共にわれわれの世界に住みかをもつようになるにつれて、「堕落した」人間に対する天国にいます神の威光は、その効力のほとんどを失うこととなり、精神と物質との間の相対的な力の優劣についての問いに論争は集中するようになった、とD教授は言います。

Q　その間、精神世界と物質世界の間を調和させようとする動きはなかったのでしょうか？

I　精神と物質との間に共通点を見出そうとするかすかな可能性はなかったわけではないが、現行の科学の分類の中で捨て去られていきました。科学者たち、哲学者たち、そしてスピリチュアルな思想家たちでさえも、精神と物質は共通なものは何も有しておらず、互いに絶対的に相容れないということを当然のこととして受け

入れてきました。科学は物理学あるいは自然科学へ、そして精神科学および人間科学へと二方向に分かれてきた。前者は物質を扱い、後者は精神を扱うという形で、相容れないまま併存してきたのです。

Q　両陣営とも、自らの陣営を主張すべき強力な論拠を持っていたでしょうし、また、多くの擁護者をかかえていたわけですね。

I　そうです。結局、両方とも、相手を負かすまでには至らず、独自の道をそれぞれ歩んでいくことに甘んじてきた、とD教授は述べています。そして、この状況はずっと続いてきたわけであり、クリシュナムルティが新しい教えを述べ始めたときにおいても、知の世界を覆っていました。

Q　そして、いよいよこのような精神と物質の相対立する世界観の上に人々が居座っている状況の中に、クリシュナムルティが登場してくる、というわけですか？

I　ええ。クリシュナムルティの登場はまさしく「一つのとてつもないシーン」だったわけです。

Q　クリシュナムルティの新しい教えは、当時の思想風土にあってどのような特色をもつものとして登場してきたと言えるのでしょうか？

I　それは、彼の初期の頃の教育的訓練や霊的到達点に基礎づけられているというより、むしろ、知の世界がその当時拠って立っていた状態や直面せずにはおれない中心的な問題へのクリシュナムルティの洞察によるところのものであったと、D教授は述べています。まさしく目の前の切実な問題をあるがままに、その深層から見抜く眼力がクリシュナムルティにはあったということでしょう。

Q　世界が直面しなければならない課題として、彼が見抜いたことは一体何だったのでしょうか？

I　それは、「神対人間」でもなく、「天国対現世」でもなく、「精神対物質」でさえもなく、それらの図式とは根本的に異なる見地――「精神―物質」観、あるいは「霊魂―肉体」観と呼ばれているところのもの――で世界を見ていくということです。

Q　それは単に物質的なものでもなく、精神的なものでもないということですか？

I　ええ。この世界は、一つの統合された「精神―物質」世界であり、この中でわれわれは新しく自然を理解

していかなければならない。そうすれば、実際に獲得した新しい洞察に基づいて生きるようになるのだ、とD教授は述べています。（傍点D教授）

Q　一つの統合された「精神―物質」観でもって世界そのものを見ていこうとすることの真意を理解していくためには、われわれは何か特別な心構えが必要なのでしょうか？

I　D教授はそのことに関しては、自分自身の中にあるあらゆる前提を捨ててかからなければならないと述べています。それで、クリシュナムルティが提起する問いは、まずもって哲学・科学両方から投げかけられるものと同様な問い、すなわち「宇宙の主導者は何者であるのか？」というものです。

Q　この問いは、永遠の問い、意識をもつにいたった人間にとっては問わずにはおれない究極の問いと言えるものですね。

I　この問いに対しては、時代を超えて、様々な思想家によって色々な方法で答えられてきました。

Q　神、アートマン、霊魂などですか？

I　そうです。さらにイデア、エンテレキ（活力）など、様々に名づけられてきており、そして現在通用している名前が「エネルギー」である、とD教授は言います。

Q　現在科学者たちが受け入れているエネルギーは、もっぱら物質的なものですね。

I　まさしく。$E=MC^2$が主導者の唯一の表現法であるなら、われわれは精神についてはまったく無知な状態に留まることであろうと。それゆえ、クリシュナムルティは精神もまたE、すなわちエネルギーであることを指摘し、われわれの考え方に修正を加えるのだ、とD教授は言います。

Q　精神もエネルギーである、との指摘は、エネルギーは物質のものであるとのエネルギーのいわば片肺飛行に強力な援軍がやってきた、というふうに私は感じますが。

I　クリシュナムルティ言うところの主導者たる「E」は「精神―物質合成エネルギー」なのです。このことは、一見して感じられるよりも革命的な声明である、とD教授はクリシュナムルティのエネルギー観を評価します。

Q　「E」を「精神―物質合成エネルギー」として見ることが、真に妥当性をもつかどうかについては、これから理論的にも実際的にも新たに研究されなくてはならないわけですね。

I　そうです。「E」を「精神―物質合成エネルギー」と見なすことにより、これまでの片肺の危なっかしい、エネルギー浪費的飛行から両翼による力強い飛行が可能になると言えばわかりやすいでしょう。

Q　なるほど。では「E」を「精神―物質合成エネルギー」と見なすことを基本に据えて、これを人間の諸事象に対して適用していく場合、気をつけなければならないことはどのようなことなのですか？

I　様々な事象なり現象を捉えていく際、これまで当然のこととして見直すことのなかった既知の事実に対して、精神あるいは物質のいずれか一方からの見方を排して、「精神―物質の合成物」または「心身的実体」として把握していくことの必要性をクリシュナムルティは強調しているのです。

Q　「精神―物質の合成物」という場合、精神と物質の両者の接点をどのようにクリシュナムルティが見ているのか、ということが重要となるのではないかと思いますが？

I　難しいところ、かつ慎重な考察を要するところにきたと思いますので、落ち着いてゆっくり一歩ずつ着実に見ていきましょう。物質は三次元に拡がりをもっているものの、精神には拡がりというものはなく、三次元のどの次元の部分の中にも分割されるものではない。しかるに、精神はと言えば、「理解する」ことができるのみで、現在―過去―未来の三次元を有しているが、この三つの次元は物質には欠けている。しかし、両者の間の違いは和解できないものとは思えない、とD教授は言います。

Q　「物質の空間的拡がり」と「精神の理解力」が敵対せずに和解できる道はあるのか、これは大問題ですね。

I　私の前の「物理的」光景は、拡がりとしてあるのみならず、それは同時に、精神的にイメージされた、理解される光景として喜ばれるものとしても存在している。同様に、精神的にイメージされた、理解された光景は、また、空間を占めるべく拡がりを持っている、とD教授は言います。

Q　なるほど。精神も物質も両方ともに理解力とともに拡がりを有している。それは決して純粋な拡がりでも、また純粋な理解力でもなく、それはいつも結びついているというわけですか？

I　それは、人工的に二つに分けられる時にのみ、通常の経験から抽象され、分離されたものとして取り扱われる時に、和解できないものとなる、とD教授は述べています。

Q　これまでの話を聞いていますと、第四章で中心的テーマとして考察してきたリアリティの正体について、エネルギーの視点からの考察もできそうですね。

I　ええ。D教授も「精神―物質」の形でのエネルギーが昇華したものがリアリティであると言います。科学者によって主張されたものとしての拡がりのみでなく、またスピリチュアルな思想家によって主張されたものとしての理解力のみではなく、この合成体としてのリアリティは、時空のものであり、二つの局面が互いに精神と物質として両立できるものとしてある、と。

Q　時間と空間が両者の間でどのように両立できるのか、今少し具体的に説明願えますか？

I　まず、時間は移動した空間により計られるし、時間によって計られる空間は、時間が空間を移動することにより計られる。つまり、空間の次元――長さ、幅、固さ――と時間の次元――過去、現在、未来――にはこのように互いに両立でき、しかもそれらは合成したリアリティの次元にあり、どれも排他的に一つの側か他方の側に割り当てられる必要はない、ということです。

もう、あなたは気がついたかも知れませんが、これこそがアインシュタインが時間を物質の第四次元として主張する理由であり、また、クリシュナムルティが精神と精神との間の交感のために、空白の空間を主張する理由となっているものです。

Q　ところで、精神と物質にとって、われわれの脳細胞はどのような役割をもっているのでしょうか？

I　脳細胞は、「精神―物質の合成物」の貯蔵庫であり、もしこの絶対的で純粋な心身的なもののもつエネルギーそのものに到達したいならば、われわれは心身的なものがどのように日常生活の中で働いているのか、を注意深く観察しなければならない、とD教授は述べています。

Q　日常生活の中で縦横に働いていくこのエネルギーの正体を言葉で表現していくことは、極めて難しいことになるわけですね。

I　そうです。これまでの読解を通して何度も登場したクリシュナムルティの一大特色となっている「否定的表現」の問題です。D教授は例えば「無限」という言葉の中に含まれる肯定的表現としてのこの上ない確実性に言及していますが、「同一化せず」「正当化せず」「非難せず」というこれまでにたびたび登場した言葉の真意も、否定的表現の裏に隠された肯定的性質を有していたわけです。

Q　心身的エネルギーが日常生活で働いている時、どのような形でそのエネルギーが変換されてくるのか、ということについてのクリシュナムルティの見解を伺いたいのですが。

I　それは端的に言って「概念的思考」に変換されてくるのが、他ならぬ心身的エネルギーなのですね。この種の思考の欠陥はどのようなものだったですか？

Q　物事の全体を見ずに、断片化による部分の支配が横行したり、過去の知識などに翻弄されたり、まだ見ぬ未来への恐怖感にさいなまれたりすること、など。それからもう一つ忘れてはならないのが、かなり詳しく見てきました「自己」の支配の問題です。そしてこれらの欠陥をただしていくのが、いわゆる「気づき」であったわけですね。

I　ところで、心身的エネルギーが自由に流れ、脳細胞に影響されず、それゆえそれ自身の支配力を行使する静かな精神のことをD教授は「ダイナミックな精神」と呼んでおり、それをクリシュナムルティが「気づき」とか「気づきの状態」と呼んでいるものに対応させています。

Q　「気づき」は、極めてセンシティブな行為を意味する言葉として最適であり、これは何度強調してもし過ぎることはない、とこれまでの読解を通して素直に実感できますね。

I　概念的思考は闘争、支配、残虐、悲しみ、恐怖、苦悩、戦争をもたらしているが、「気づきの状態」において発見された「精神―物質」の合成された状態は、愛、美、創造性を、しだいに成熟していく感覚により明らかにする、とD教授は述べています。

Q　ここで、素朴な疑問かも知れませんが、心身的エネルギーが脳細胞に影響されないというのは、いわば精神と物質の関係を代弁しているように私には感じられました。つまり、精神の働きとして流れてくる心身的エ

ネルギーはいわば英知の形をとるのではないかと思います。そうなると英知は、脳細胞のその時点での状態に影響されないというのでは、根本的な変容にはほど遠いのではないか、と思うんですね。英知は、逆に積極的に脳細胞に接触することにより、脳細胞そのものの状態に変容をもたらすことができなければ、という思いがあるんですが。

I　私の舌足らずの説明を補ってもらいましたが、今あなたが指摘してくれたことは、非常に重要なことだと思います。この問題に関しては、クリシュナムルティとボームとの間で繰り広げられた討論を収めた『人類の未来』（前掲書）のことを、前に紹介したと思います。その中で、ボームはクリシュナムルティとの間で、頭脳と精神の関係をめぐって、まさに火花を散らす討論を展開していました。思い出してもらえましたか。

Q　洞察を通じて精神は脳細胞を変化させ、破壊的な条件づけを取り除くことができるとクリシュナムルティが強調していることをボームが触れていたことですね。

I　クリシュナムルティが終生持ち続けた人間一人ひとりに内在する可能性への信頼、これは今のお話によれば心理的変容のみならず脳細胞自体の物理的・生物的変容の可能性を含めて、クリシュナムルティは大いなる提示を行ったというわけです。

I　ええ。それから、もう一つこのことに関して触れておきたいのは、『人類の未来』の中で、エネルギーの正体をめぐる興味深い討論が展開されていることです。結論を言いますと、思考と英知は別々の方向に動いている二つの流れであるが、これはわれわれが生存していくためにもともと一つであったエネルギーが二つに分かれてしまった、とクリシュナムルティは言います。

Q　要するに英知の中の一部が分化して生存のために、肉体維持のために思考エネルギーに転化されていったと理解していいわけですかね。

I　ええ。英知も思考もエネルギーの別の形態ですが、クリシュナムルティが言うには、元々一つの統一性をもった源泉から両者から生まれてきた。それは生き延びることが大きな要因だった、と。

ここで付言しておきたいことは、「源泉」についてのボームの考え方です。それは氏の『全体性と内蔵秩序』

（井上忠・伊藤笏康・佐野正博訳）の中に披瀝されているものです。ボームによると、より深い内奥にあって両者を包括する実在があり、それは心でも身体でもない。それはむしろ心や身体より高次元の、本性上それらを超越した実在なのであり、そしてまたそれこそが両者をともに在らしめる共通の根拠なのである、と言うのです。

ボームは心と身体はおのおの相対的に独立した亜総体（副全体）にすぎず、それらの相対的な独立性は、両者がそこにおいて究極的に一つとなる高次の根拠から派生する、と見ています。そして、この高次の根拠を支配しているのが「内蔵秩序」なのです。これは、心と身体が因果的に影響を与えあうのではない。むしろ両者のそれぞれの運動は、ある高次の共通根拠の射影どうしが関連しあっている結果なのである、という考え方なのです。

Q クリシュナムルティの「源泉」の捉え方と同じ方向に向いているように思えますね。

I そうですね。もう少し、ボームの見解に耳を傾けてみましょう。ボームのこの「内蔵秩序」の考え方は、実にスケールの大きいものであり、この考え方は自分以外の他者、社会、ひいては一つの全体としての人類をも包み込むものであるということ。そして、自然も人間も、社会も人類も、それらはみな単一の総体の射影なのであり、この総体の過程に参与するとき、まさにそうすることで人間はその根柢から変えられると説いています。

ボームによればわれわれはより包括的な根拠へと進んでいかなければならないということになるわけです。ボームはこの本の最後の部分で、印象深い洞察を示しています。

われわれの探求全体を通じて、宇宙とは何か、物質一般とは何か、生命とは何か、意識とは何かという問題が一つの光のもとに召集された。これらはすべてある共通の根拠の射影と考えられる。この共通の根拠は、少なくともわれわれの意識の現在の披き出し段階にとって感覚され知られうるといういみで、存在するあらゆるものの根拠と呼べるだろう。たしかにこの根拠についてわれわれはいまだ何ら詳しいことは知らない。それを観た者もいない。だがそれはあるしかたで、われわれの意識中に包み込まれているのである。

Q　ボームのいうこの根拠は、究極的、絶対的なものなのでしょうか？

I　ええ。原理的には根拠をめぐっては無限の発展がありうる、とボームは述べています。われわれはこの総体のさらに深い内奥の必然力の働きによって、われわれが知る世界とそれについてのわれわれの観念とがともに停滞を知らず永久に変化し続けるような、何らかの新たな状況が出現することであろう、とのボームの言葉からして、この総体は静的なものではなくわれわれの生の鼓動とともに新たな相を見せていくダイナミックなものと考えていることが伺えるのではないかと思います。

Q　では、ボームとクリシュナムルティの関係に戻りますが、両者は根拠、源泉をめぐって完全に軌を一にしているのでしょうか？

I　これは難しい質問ですが、完全に一致はしていないと思います。例えば、ボームの言葉として先程紹介した中にあったように、「共通の根拠」がわれわれの意識中に包み込まれていること自体について、クリシュナムルティがどう考えていたのかということについては明言されていないのでわかりかねます。でも、心と身体に対してある高次の共通根拠の存在を認めている、すなわちクリシュナムルティの場合は「基底（グラウンド）」という言葉で表現しているものですが、この点については認識がきわめて近いということは言えると思います。

Q　なるほど。「共通の根拠」、「源泉」、「基底」をめぐる両者の考察、これは今後人類が探求していかなければならない重要な問題であることはつかめたように思います。それでは、話をエネルギーの問題に帰らせてもらったらと思います。さきほどのお話で、一つの統一性、全体性をもったエネルギーは、われわれが生き延びていくためにその統一性、全体性が否定されていってしまったということですね。

I　そうです。そしてクリシュナムルティは次のように切実な心情を吐露しています。

　この世界に生きているひとりの人間として、このことを見出したいのです。人間の精神はそのふたつの区別が存在しないその源泉に触れることができるでしょうか？　そして、区別の存在しないこの源泉に触れたがために、

精神は分離感なく働くことができるでしょうか？

Q　源泉の正体がとても気になりますが、これはクリシュナムルティ自身の体験によって裏打ちされたものではないのか、そうでなければ言えない言葉ではないかと思うのですが。

I　確かにその通りだと思います。そうでなければ、「源泉」という言葉は、単なる言葉であり、実質を伴わない空虚なものであると言わざるをえないわけですからね。クリシュナムルティに訪れた神秘的体験は一九七九年十二月中旬のこと、彼がインドのリシバレー（仙人峡谷）到着後に起こった出来事として、記されています。詳細は『クリシュナムルティの世界』（大野純一編訳）にありますので、読んでみていただけたらと思います。ここでは、要点だけ紹介します。

ある晩、世界のその地方の不思議な静寂のなかで、ふくろうのホーホーという鳴き声によっても破られない沈黙とともに彼（クリシュナムルティのこと：稲瀬注）が目を覚ますと、何かまったく異なった新しいものに気づいた。その運動はあらゆるエネルギーの根源に達した。……いかなる確信をもってそれがすべてのエネルギーの根源だとあなたは言うかと、人は尋ねるかもしれない。これに対してはただ、事実そうなのだと、全き謙虚さをもって答えうるだけである。……毎晩彼はこの絶対者の感覚とともに目覚めた。……人間にとって無量の全宇宙がそのなかにある。……これが究極のもの、始まりであり終わりであり、そして絶対なるものである。あるのはただ、信じがたい広大さと途方もない美だけである。（傍点稲瀬）

Q　歴史上、宗教的覚者による様々な神秘的体験が現実にあったということは厳粛なる事実として今日広く認められていると思いますが、クリシュナムルティのケースも人類史上そうしたケースの一つとして位置付けられるのでしょうか？

I　そこは、大変難しい問題をはらんでいますが、彼に起こったこの出来事に関して「重要なのはクリシュナ

ムルティという個的存在ではなく、この無始無終の究極的運動・エネルギーであって、われわれのうち十人でもその働きの場となれば、人類全体の意識にとてつもない作用を及ぼし、人類を破局への歩みから転じさせうるだろう」とクリシュナムルティ自身述べているように、問題はこの無始無終の究極的運動・エネルギーそのものなのですね。この究極のエネルギーの実在について、クリシュナムルティ自身は今までも触れましたように「基底（グラウンド）」という言葉で表現しています。

Q　「基底」はクリシュナムルティの身体を通じて働いている、つまりはクリシュナムルティ自身もその超時間的、運動の働きの場として使われていることを認めているというわけですね。

I　そうです。ただ、一九八〇年すなわちリシ峡谷での神秘体験の翌年に行われたクリシュナムルティとボームとの対話（『クリシュナムルティの会　会報第34、35、36号合併号』）の中で、クリシュナムルティはこう述べています。

覚者は、自分は人間の初めからずっと終わりまで歩んできた。そしていま時間を超越した運動のなかにあり、宇宙、コスモスなどの一切である〈基底〉に触れたのだと言います。そして〈基底〉は人間を必要としないが、しかし彼がそれに出会ったのだ。

Q　「基底」に触れた覚者は、まだそれに触れ得ていない非覚者に何かをもたらしてくれるのですか？

I　それについて、クリシュナムルティは端的に「光」であると言っています。「光」によって見られたもの、それはたとえ小さな部分であっても、その小さな部分は無限に延びており、そのようにして見られた無限が全宇宙なのである。それは非覚者、社会に何かとてつもない影響を及ぼすにちがいないと思わざるをえないが、ただ、それは個人にはできないことなのである、と述べています。

Q　個人にはできないということになると、一体どうすればいいのですか？

I　今のあなたの問いと同趣旨のことをボームが投げかけていますが、そのことについてはボームの言葉を受

けて、個人ではなく無限なるものが人間の成り行きを転換するのであって、結局のところクリシュナムルティは「じたばたするな、ということです。なにもすることはないのです。ただ、何が起こるかを待ち、そして見ればよい」と言います。

Q　しかし、非覚者である圧倒的多数の人間たちの側からすれば、何かを追求しなければならないという一種の強迫観念から自由になれないのではないでしょうか？

I　その点についてはクリシュナムルティも同様のことを述べており、この「じたばたするな」ということの真意をつかむことは正直難しいかも知れません。このことについて二十世紀を代表する哲学者であるハイデガーに関するレックス・ヒクソンの言葉が、先の言葉を理解する上で一つの参考になるのではないかと思います。ヒクソンは言います。

> エネルギーを組織化するというよりはむしろ、深い思考は「存在するあらゆるものの中に行き渡っている意味を黙想する」とハイデッガーは示唆する。黙想的気分は、癒し、静め、そして力づける。それは人を、いたるところに行き渡っている〈有〉、輝き、あるいは〈意味〉とハイデッガーが名づけた、すべての黙想の根本的主題に通じさせる。深い思考は、表面的思考を排除するのではなく、表面をしてその究極的な基底または〈有〉に対して透き通しにしてしまう。新しい系統の小麦を育成している植物学者は、深い思考に目覚め、どこまでも行く〈有〉の輝きを黙想する時に、自分の科学的計算を放棄する必要はないのである。
>
> （『カミング・ホーム』高瀬千尋訳、傍点ヒクソン）

Q　クリシュナムルティとハイデガーが結びつけられるとは、ちょっと予想外ではありましたが、今の話からすると、黙想的思考という点において、両者は通底していると言えなくもないとのヒクソンの指摘であり、大変興味深く感じました。

I　ところで、日本におけるハイデガー哲学研究の第一人者である木田元氏と演出家の竹内敏晴氏との刺激的

な対話集である本の題名が『待つしかない、か』であり、「この題名は、ハイデガーの〈存在〉に対する最終的な態度を木田氏が要約したものであり、存在は、こちらから無理強いするのではなくて、現れを待つしかない」ということを表したものである、と宇野邦一氏（立教大学教授）が書評（産経新聞二〇〇三年三月十七日）で指摘していました。宇野氏のこの言葉に端的に表れているように、先程のクリシュナムルティがボームに語った言葉と、ハイデガーの思いが期せずして重なっていることは、何か偶然以上の不思議な因縁めいたものを感じます。

Q　かたや西洋哲学史の膨大な文献を渉猟し、西洋的知性の頂を登り詰めたハイデガー。かたや文献にたよることなく、一個の人間としての自分自身を深く掘り下げていくことにより人類史全体を探査していくことが可能との認識の下、観察、黙想を唯一の手段として無尽のエネルギーを傾けて探求していったクリシュナムルティ。両者の人生探求の一つの究極的成果が「じたばたすることはない、待てばよいのだ」という言葉として現れ出たことに、驚きの念を禁じ得ませんね。

I　今後、ヒクソンが考察していったように、クリシュナムルティとハイデガーの交照による新たな「存在」の地平が開かれていくことを期待したいですね。

さて、ここでもう一度クリシュナムルティとボームとの対話に戻りたいのですが、「基底」の有する無限のエネルギーのもの凄さ、それは全宇宙に通じているものであるとの認識は、それに到達したというクリシュナムルティ自身の体験に裏打ちされたものだけに、何とも言えない重みを感じさせられるものとなっています。そして、クリシュナムルティが人生を振り返りつつ語った、超エネルギーについての発言の中にクリシュナムルティが到達した「基底」の有するエネルギーの膨大さ、無限さを彷彿させてくれるものとなっています。

Q　「基底」は無限のエネルギーの中にあるとのことですが、そのエネルギーをクリシュナムルティの身体が受けとめたということでしょうか？

I　ええ。七十年間あの超エネルギー、巨大な英知がクリシュナムルティの肉体を使ってきたが、もはやそれに耐えることができなくなった――死が迫ったある日、そうクリシュナムルティ自身が述べています。彼の身

体を通過したエネルギーは七十年にわたる講話や対話の中で、使い果たされたと言えるのではないでしょうか。

Q　問題は、無限のエネルギーを湛えた貯水池のような「基底」に、人間の精神が触れることができるかどうかにかかってきそうですね。

I　ええ。無限の英知、あのエネルギーを持っている覚者は、人々が想像しうるよりももっとはるかに深いレベルで働くにちがいなく、そしてそれは暗黒の中で生きている人々の意識に影響を及ぼすに違いない、とクリシュナムルティは語っています。

Q　話がどんどん深みに入っていくようですが、われわれの日常生活の現場に引きつけて考えた場合に課題となるのは、「気づき」に基づいた瞑想をいかに実践していくかということであることは間違いなさそうですね。

I　おっしゃるとおり、一人ひとりにとって大切なことは日々の生活ですから、どうすればそこで「気づき」を働かせ、愛、美、創造性を生み出すことができるようになるか、ここを今少し見ていくことにしましょう。

Q　このことは、裏を返せば「概念的思考」に知らず知らずのうちに捕らわれてしまう実態をエネルギーの面から、あるいは脳細胞で起こっている現象の面から見ていくことにつながると思えますが。

I　ええ。このことについて、D教授は、概念的精神は脳細胞が精神エネルギーに罠をかけた結果生まれたものである、と述べています。エネルギーについてD教授は次のような注目すべき見解を述べています。

> エネルギーはその原初状態においては強烈であるが、エネルギーの流れが弱まるにつれて、より多くの複雑な対象物の中へと閉じ込められていく。例えば、原子、分子、アミノ酸、RNA―DNA、神経細胞、脳神経細胞など。

Q　なるほど。エネルギーは原子を始めとする様々な対象物の中にからめ取られることにより、浪費されていき、新鮮さを失っていく。そこで、登場するのが「気づき」の働きというわけですね。

I　「気づき」は、脳細胞が自分の中に精神エネルギーをとりこんで隠してしまう前に、独立して働くことが

できる精神エネルギーなのです。クリシュナムルティはこの実態を、「二つの考え方（思考）の間に横たわっているギャップ」として捉えているとD教授は言います。もし概念的思考が「物質―精神（物質の方に重点を置いたものとしての）合成エネルギー」の働きとして把握されるならば、「気づき」は「精神―物質（全面的に精神に重点を置いたものとしての）合成エネルギー」として把握することができると。

Q　これまでの話からすると、「概念的思考」は時間の中で働き、ゆっくりと過去に後戻りしながら働くかと思えば、時には夢見る未来へと投影されて働いていく。しかるに、「気づき」は、今という現在にしっかりと根をはり、概念的な思考の輪の中に取り込まれないように警戒しているときにはいつでもエネルギーの消耗を防ぐことができるということですか？

I　的確な対比となっていると思います。この点について、彼の講話の中から具体例を取り上げてD教授は印象深く説明しています。

> もしも誰かがあなたを〈馬鹿者〉呼ばわりした時に、あなたが油断の無い状態でいる、すなわち自分の中で何が起こっているのかに気づいているなら、頭の中に言葉が連想して出てきて、意味のない獲物を捕らえて離さない状態にならないようにすることができますし、あなたは動揺することなく、その場で適切な行為を自然と冷静に行うことができるのです。

Q　「気づき」を通した瞑想状態を保つことにより、精神エネルギーという偉大な力を発揮していくことができるのですね。

I　ええ。精神エネルギー――これはクリシュナムルティによって「精神―物質合成エネルギー」と見なされていたものです。このエネルギーは、現在時において最も力強く、最も建設的なものとして働き、過去の失望や未来の恐怖を打ち負かすことができる偉大なエネルギーであるというD教授の発言は、人類への大いなる希望の表明であると思います。そして、D教授は、教育は恐れや失望から精神エネルギーを自由な状態に保つよ

うにするための道を教えていくことこそを目的としなければならないとの趣旨の言葉を述べていますが、重い言葉として私自身受けとめたいと思っています。

Q　クリシュナムルティ学校を含めて、彼が学校教育に託す思いには並々ならぬものがあると言えますね。

I　ええ。昨年、緊急出版されたクリシュナムルティによる革命的教育論『クリシュナムルティの教育原論』（大野純一訳）の帯に訳者が記しているように、教育問題を真摯に模索していくことは、教育関係者のみならず、自分自身の内部の創造的エネルギーを解放させ、今や泥舟と化した観のある現代社会から心理的に脱出し、真に創造的な人生を歩むことを切望している一般人にとっても、有益なことです。なぜなら、教育は基本的に自己教育を旨とすべきであり、自らの創造的エネルギーである精神エネルギーを解放していくことを第一義的目的とするクリシュナムルティの教育観はすべての人々にとって有意義なものとなると思われるからです。